

Steel Landscape.

歓声を見守る鉄～福岡

鉄の絶景



春の訪れとともに外出の機会も多くなる。

今年もまたプロ野球ペナントレースの舞台となる福岡ドーム、
そして、オープン5周年記念期間も大詰めスペースワールド。

九州を代表するふたつのスポットを訪ねる。



ドームの最高部は84メートル、屋根の直径は212メートルにもおよぶ。この巨大な屋根が、円周の壁だけで支えられている

国際都市・FUKUOKAの顔として

雨天中止。スポーツ観戦を趣味に持つ人にとって、これほどがっかりさせられるものはない。スポーツ好きのアメリカ人であれば、なおのこと。雨の日でも風の日でも楽しめるように、スタジアムに屋根をつけようという発想が生まれるのもごく自然な成り行きだ。テキサス州ヒューストンに世界初の全天候ドーム球場「アストロドーム」が完成したのは、1965年のことだった。これを皮切りに、次々と各地に大型ドームが誕生していく。スーパードーム、キングドーム、シルバードーム……。そして、88年、東京にもドーム球場が完成し、それを追うように93年、「福岡ドーム」がオープンした。収容人員は最大で52,000人。3層のパネルに分割された屋根は日本初の開閉式で、約20分で開閉が行なえる。屋根の表面材として採用されたチタンは0.3ミリの厚さで、5万平方メートルにわたってドームを覆っている。

世界的に見て、ドーム球場の建設は、ここ30年の間に大いに盛んになった。さまざまな都市で建設を急ぎ競い合っていた状況だ。その背景としては、コンベンションビジネスの隆盛があげられている。つまり、ドームのような大規模なスポーツ施設はコンベンションホールとして最適であり、そうした施設を持つことで、情報や文化を集約する場としての都市像を構築していきやすい。イメージも大きくアップする。福

岡ドームもまた、国際都市として福岡が歩みはじめるための、起爆剤的な役割が大きい。

福岡ドームは「ホークスタウン計画」の一角を成している。この計画の骨子となるのは、ドーム以外に、「シーホークホテル&リゾート（95年オープン）」と「ファンタジードーム（仮称／オープン未定）」がある。この3つの施設要素によって、ホークスタウンの都市機能は成り立つことになる。インターナショナルなコミュニケーションをはかる中で、アジアの拠点都市としての役割を果たそうというとき、どうしても欠かせない機能が、この計画には盛り込まれているわけだ。

昨年は福岡市でユニバーシアードが開催され、国際都市としてのイメージを強烈に、世界にアピールした。ローリングストーンズやマドンナが公演を行ない、サッカーやアメフトもここでゲームをする。ガレッジセール、草野球から国際大会まで、ここには数多くの歓声が、年間を通して地域から、そして世界から集まってくる。そこには、もちろん雨天中止の文字は躍らない。

つねに変化をつづけるスペースワールド

福岡第二の都市、北九州市にはふたつの人気名所がある。そのひとつは、門司港地区に整備された「レトロ地区」だ。まだ全国的にはそれほど知られていないようだが、ここには

© SPACE WORLD, INC.



門司港がもっとも栄えた明治末期から大正期にかけての建築物が復元されている。地区が整備されて1年が経過し、九州他県や山陰からの観光客は増えつつあるという。もうひとつの名所が、新日本製鐵（株）が複合経営の一環として取り組んできた「スペースワールド」。世界ではじめての宇宙をテーマにしたテーマパークだ。

オープンして昨年で5周年を迎えたが、テーマパークがオープンしてから短期間のうちに、これほど大きく様替りした例はないだろう。まず、当初あまりに平坦で寂しい印象を与えた中央の広場が、植樹により立体感と暖かみを増し、親しみやすく快適な居心地をつくりだした。また、アトラクションが13から35に増えた。こうした中で、平均滞在時間は一人あたり約1時間延びたという。より長く楽しんでいられる場所へと進化を遂げているわけだ。初年度以来、訪れるゲスト（入場者）の声を最大限に取り入れつづけてきた結果といえるだろう。

呼び物となっているのが、ローラーコースター「タイタン」だ。世界最大級のこのコースター、まず地上56メートルの高さまで上り、そこから一気に急勾配を落下していく。60度の勾配は日本一。スキーのジャンプ台助走路の37度と比較しても分かるように、実際に乗った感覚ではほぼ真逆さまに落ちていくといっている。56メートルの高さは20階建てのビルほどだから、ビルの20階からまっすぐ落下していくといった趣。ここで最高速度115キロ（日本一）をマークする。髪は風で逆立ち、高速落下の浮遊感に襲われ、極度の緊張で足はすくむ。コースター好きにはたまらない瞬間だ。

ローラーコースターにもさまざまな形態があり、ラクダのコブのような形のキャメルバックコースターや、ループのあるルーパー、さらに吊り下り型のサスペンデッドといったように分けられる。また、材質によって木製、スチール製があるが、この「タイタン」はスチール製のキャメルバック。いわゆるコースターの王道をいくタイプといえる。

次々と新しいアトラクションやイベントを導入し、変化をつづけるスペースワールド。ゲストから集められる数々の「声」が、いずれ歓声となって場内に響きわたることになる。



写真の「タイタン」について、この3月には新コースター「ヴィーナス」が誕生する。コースターの神様、アントン・シュワルツコフ氏が基本設計を担当。日本最大級のループが売り物だ